

ワインと食とSakeと

# ヴィノテーク

いよいよ  
面白日本ワイン  
山梨に甲州種の履歴を追つて



2018.10  
No.467



歴代ハプスブルク皇帝の居城だった王宮を会場にするヴィーヴィナム。

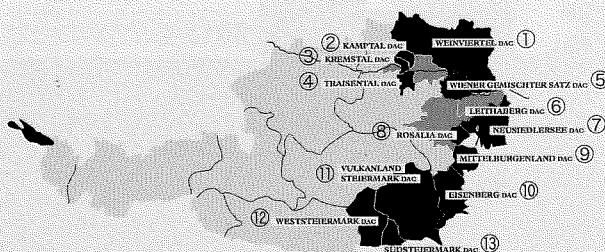
王宮内の豪華な内装の大ホールなどに、産地別にワイナリーが出展。

歴史的建物の一部はモダンなガラス天井に改修されているが、猛暑となった6月のウィーンでは、午後には殺到する来場者も相まって、室温は見る見る上昇した。

## オーストリアワイン最新事情

オーストリアワイン・マーケティング・ボード (AWMB) は今年6月9日から11日まで、首都ウィーンで、隔年で行われるワインイベント「第25回ヴィーヴィナム Vievinum」を開催した。ホーフブルク（王宮）を会場に開かれた試飲会は、午前中はオーストリアおよび海外から招待されたワイン業界関係者に参加を限定したが、午後からは有料で一般消費者にも門戸を開放した。約550のオーストリアおよび周辺諸国のワイン生産者が出展、50カ国以上から15000人が来場。日本からはインポーター、“オーストリアワイン大使”など、ワイン業界関係者が多数参加した。会期中には異なるテーマのセミナーやディナー・パーティなども開かれた。

〈文・写真 蟹沢登茂子〉



### DACリスト

( ) 内は認定品種

#### ■ニーダーエストラーハイ

- ①ヴァインファイアル (グリューナー・ヴェルトリーナ)
- ②カンプタール (グリューナー・ヴェルトリーナ、リースリング)
- ③クレムスター (グリューナー・ヴェルトリーナ、リースリング)
- ④トライゼンタール (グリューナー・ヴェルトリーナ、リースリング)

#### ■ウィーン

- ⑤ヴィーナー・ゲミシュター・サツ

#### ■ブルゲンラント

- ⑥ライタベルク (ピノ・ブラン、シャルドネ、ノイブルガー、グリューナー・ヴェルトリーナ、プラウフレンキッシュ)
- ⑦ノイジードラーーゼ (ツヴァイゲルト)

- ⑧ロザリア (プラウフレンキッシュ、ツヴァイゲルト)

- ⑨ミッテルブルゲンラント (プラウフレンキッシュ)

- ⑩アイゼンベルク (プラウフレンキッシュ)

#### ■シュタイヤーマルク

- ⑪ブルカンラント・シュタイヤーマルク (ヴェルシュリースリング、ピノ・ブラン、ソーヴィニヨン・ブラン、トラミナーなど)

- ⑫ウェストシュタイヤーマルク (プラウアー・ヴィルトバッヒャー) <sup>※1</sup>

- ⑬ズートシュタイヤーマルク (ソーヴィニヨン・ブラン、ムスカテラー、ピノ・ブラン、シャルドネ、リースリングなど)

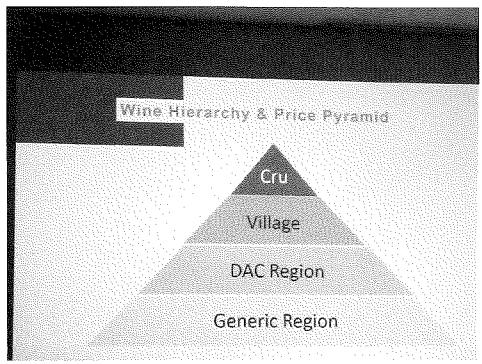
※1:2017年10月にシリヤーラント DACと制定されたが、2018年7月に改名



オーストリアの原産地とその地理的階層の説明に熱が入った、オーストリアワイン・マーケティング・ボード代表のヴィリー・クリンガーさん。



産地を超えて、エアステ・ラーゲのグループ（非公式だが、一級畠の格付け化を進めている）はひとつの会場にまとまり、出展。



クリンガーさんのプレゼンテーションで紹介されたワインのヒエラルキー（階層）。Village = オルツヴァイン、Cru = リートだという。

## オーストリアワイン展望

セミナーのひとつは、AWMB 代表のヴィリー・クリンガーによる「オーストリアワイン展望」と題した最新事情の発表で、「2011年以降、生産量が減少し、需要に応えることが難しい年が続いたが、2017年に収穫量は復調し、ようやく“売れる”だけの量を生産できるようになった」と、冒頭で語った。

世界の葡萄畠のわずか1%を占めるにすぎないオーストリアだが、ここ数年は度重なる霜害など自然災害に見舞われ、ワインの減産が続けていた。

### 原産地にフォーカス 増える DAC

クリンガーのプレゼンテーション中、最も力が入っていたのが、AWMB の戦略のひとつでもある「原産地」および「階層」に関するものだった。

オーストリアワインは EU のワイン法に準じ、「オーストリア Austria」（国名のみで地理的表示なしのワイン。その生産はごくわずか）、「ラントヴァイン Landwein（ベルクラント Bergland、シュタイヤーラント Steierland、ヴァインラント Weinland の3つの葡萄栽培地方名がある地理的表示保護ワイン）」、「クヴァリテツヴァイン Qualitätswein」（ワインのキャップシールに赤と白の認証ロゴ付きの原産地保護ワイン）の3種がまずある。

規制や干渉を受けたくない生産者がラントヴァインを選択することが多い。オレンジワインや

ナチュラルワインなどがそうだ」と指摘する。

クヴァリテツヴァインには、多彩さが主眼であるニーダーエスタライヒ、ブルゲンラント、シュタイヤーマルク、ウィーン、そして栽培面積はわずかだがオーバーエスタライヒ、ザルツブルク、ケルンテン、チロル、フォアアールベルクの連邦州を包括的生産地域とするジェネリックなものと、産地ごとの特徴を主眼とする17の限定的生産地域がある。この取材を行った6月時点ではそのうちの11が DAC (Districtus Austriae Controllatus) に認められていた。

この中には、今年4月に DAC に認定されたばかりのロザリア Rosalia が含まれる。産地はブルゲンラント州のライタ丘陵地の南に位置する、標高750mのロザリア丘陵地帯。赤ワインはブラウフレンキッシュとツヴァイゲルト、ロゼワインはクヴァリテツヴァインに認められている黒葡萄から造られる。

残り6つの限定的生産地域はまだ DAC に認定されていない。論理的にはクヴァリテツヴァインに認められる36品種（白葡萄22、黒葡萄14）を用いることができるが、それぞれの産地に適する、主要となる品種がある。「DAC に認定されてない産地のうち、シュタイヤーマルク州のブルカンラント・シュタイヤーマルク Vulkanland Steiermark とズュートシュタイヤーマルク Südsteiermark がヴィンテージ2018から DAC に認められる予定だ（7月2日に公式に認定発表された。8月号既報）。ヴァッハウ Wachau は現在、国立ワインインスティテュートに DAC を申請中。カルヌントゥム Carnuntum も早ければヴィンテー

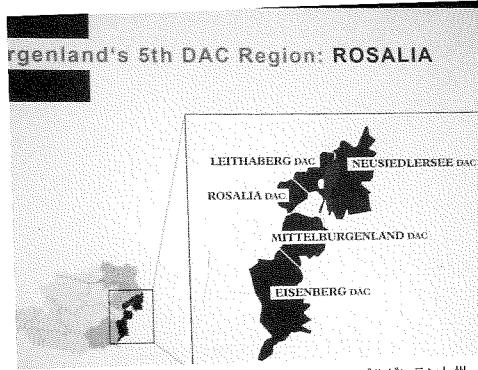
ジ2018から認定される予定だ。テルメンレギオン Thermenregion は規定整備を話し合い中というから、おそらくヴィンテージ2019には DAC に認定されるだろう。唯一、ヴァグラム Wagram では、生産者間で DAC に昇格したいかどうかの話し合いが行われていないようだ」と言う。

### 地理的階層について

クリンガーはさらに、DAC ワインのピラミッド形の3つの階層についても説明した。

ピラミッドの一番下はゲビツヴァイン Gebietswein。例えば、ヴァインフィアテル DAC など、一般的にすでに認められている地方・地域の特徴をもつもの。その上はオルツヴァイン Ortswein、つまり市町村などコムーネ（基礎自治体）のもので、フランスのブルゴーニュでヴィラージュ（村）と称されるものに該当し、地方・地域の中でも村ごとの独自な特徴をもつワイン。ピラミッドの頂点がリート Ried (Riedenwein) で、これは単一畠を意味する。「ワインの原産地をラベル上、畠まで追跡できる地理的呼称の階層だ。オーストリアでは単一畠の公的なマッピングが早い段階で完了するはずだ。すでにエアステ・ラーゲ Erste Lage の格付けを行っているグループとの話し合いを始めている\*\*。この格付けはまだ公的なものではないが、定義や規定などを明確にしていくつもり。だが、リートは市場へのインパクトが大きく、マーケティングには有利だ。とはいっても、急いで事を仕損ずるので、慎重に進めている」と。

※2 ヴィノテーク2017年11月号に現地取材レポート掲載。グループとは ÖTW（オーストリア・トラディショナル・ワイン・エステート協会）のこと。カシタール、クレムスター、トライゼンタール、ヴァグラムに、ヴィーンとカルヌントゥムも加わり、格付けを進めている。



今年認定されたばかりの11番目のDACのロザリアは、ブルゲンラント州第5番目のDAC。

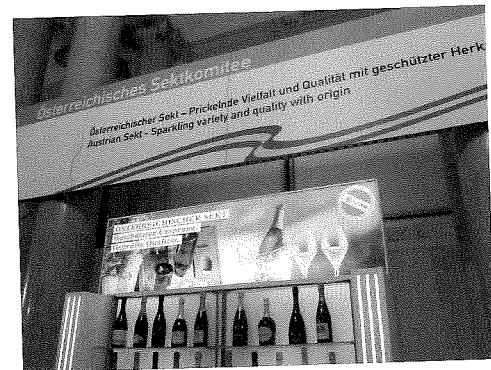
また、2016年に公的に認められたゼクトのPDOの新規定(ヴィンテージ2017から施行)と、ピラミッド形の下からクラシック、レゼルヴェ、グローセ・レゼルヴェの3階層についても説明した※3。

#### 最新の認定品種 地球温暖化対策の品種

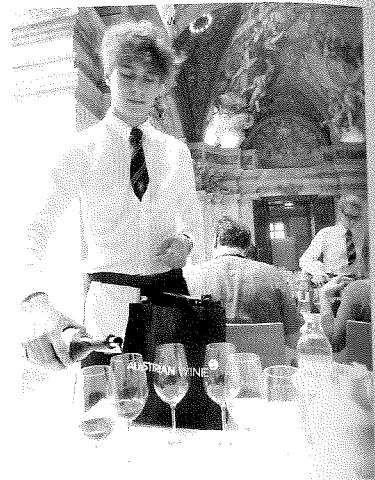
クヴァリテツヴァインには36品種の使用が認められているが、この中には2017年に認可されたばかりのローゼンムスカテラー Rosenmuskateller も含まれる。この黒葡萄を用い、すでにブルゲンラントのノイジードラーイゼー DAC の生産者クラッハーハーが甘口ワインを生産しているという。

また、認定品種ではないが、最近、ライベルク DAC の生産者ハンス・モーザーが樹齢200年以上の古木を発見、DNA検査の結果、グリューナー・ヴェルトリーナーの母親のザンクト・ギアジョン St. Georgen (セント・ジョージアン) だと判明したという。

ところで、ヨーロッパの中では冷涼なワイン産地のオーストリアだが、温暖化は進んでおり、1980年と比較して現在の平均気温は2°C高く、暑い夏と干ばつ、降雪量減少の傾向にある。このため病害も増え、病原菌に耐性のある交配品種、レースラー Roesler とラータイ Rathay の黒葡萄が2000年にクヴァリテツヴァインの認定品種となっている。



異なる産地で、高品質なゼクトが次々に発売されるようになってきた。



オーストリアのソーヴィニヨン・ブランとピノ系品種のテイスティング。

#### オーガニック事情

オーストリアにはオーガニック栽培を実施、認定を得る679の栽培者がいて、葡萄畠全体の13%を占める。また、2014年から環境、経済、社会のサステナビリティ(持続性)を実践する生産者には「Nachhaltig Austria (英語表記は Sustainable Austria)」の認証が与えられるようになった。

#### オーストリアの ソーヴィニヨン・ブランと ピノ・ノワール

ヴィーヴィナム開催前日、AWMBは「オーストリアのソーヴィニヨン・ブランとピノ・ファミリー」のテイスティング会を行った。これらはオーストリアの葡萄栽培面積において決して大きいものではないが、高品質なワインが造られていることを示すために、AWMBは今回のテイスティングのテーマに選んだという。

ちなみに、オーストリアでソーヴィニヨン・ブランは1248ha、そしてピノ・ブランは1971ha、シャルドネは1617ha、ピノ・グリは226ha、ピノ・ノワールは616haの栽培面積がある。

テイスティングに供された25種のソーヴィニヨン・ブランは、ブルゲンラント産の2種を除けば、ヴルカンラント・シュタイヤーマルクとズュートシュタイヤーマルクのもので、このことからもシュタイヤーマルク州が主産地である。

ることが分かる。この品種は、19世紀にフランスからオーストリアに運ばれ、栽培が始まった。以前はムスカット・ジルヴァーナーと呼ばれていたのだが、現在はこの名称の使用は禁じられている。

得点を独自に付けてみたところ、高得点だったのが、エルヴィン・サバティのリート・ポッスニツツベルク・アルテ・レーベン GSTK 2015とポルツのリート・ホホグラッスニツツベルク GSTK 2015。どちらもかんきつ類のアロマ、ストラクチュアがあり、みずみずしさも素晴らしい、フレッシュな酸味とミネラルさをもつ。ニュージーランドでもボルドーでもロワールでもない、産地特性と秀逸さが感じられた。

ピノ・ノワールは15種が出され、産地はいろいろだった。軽やかだが青み、ビターさを感じるものが多く、出品ワインからはオーストリアのピノ・ノワールの潜在力とは何かを見いだすことは難しかった。

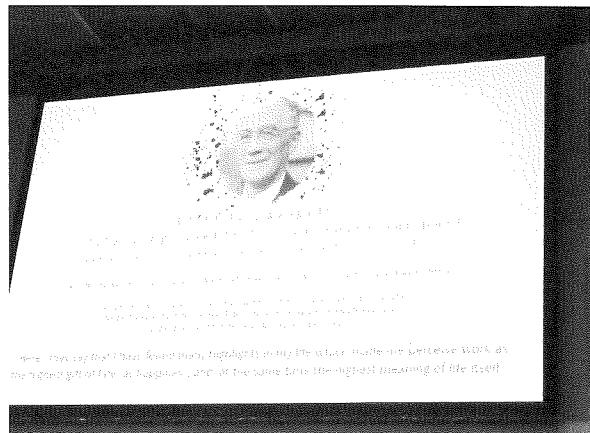
#### オーストリアと周辺諸国 のブランキッシュ

オーストリアの黒葡萄の栽培面積2位はブルガーフレンキッシュだ。3009haある。ホイニッショ (グエ・ブラン) とブラウエ・ツインメットトラウベの自然交配によってオーストリアで誕生した固有品種。文献に最初に記されたのは18世紀だったが、当時ドイツではレンベルガーと呼ばれたり、それはオーストリアのニーダーエスタライヒ州のリンベルクという村の名前に

※3: ヴィノテーク2016年8月号に詳しきり。



「多くの顔をもつツヴァイゲルト」のセミナー。



ツヴァイゲルトを交配によって誕生させたフリッツ・ツヴァイゲルト博士。改名によって自分の名前がこの品種に付けられたことを知らずに亡くなつた。

由来していたからだという。ツヴァイゲルト、ブラウブルガー、レースラー、ラータイなどの交配品種の一方の親である。

オーストリアではブルゲンラント州の北・中・南部やニーダーエストラハーハウス東部が主要産地。ブラウフレンキッシュは自然条件を選ぶそうだが、アイゼンベルク、ミッテルブルゲンラント（ブラウフレンキッシュの土地とも称される）、ライタベルクの主要品種で、近年、カルヌトウムはこの品種の素晴らしいワインの産地として知られている。さらに、オーストリアと国境を接する国々や、遠くアメリカのニューヨーク州やワシントン州でも栽培されている。

ヴィーヴィナム期間中にはオーストリア、ドイツ、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、スロヴェニア、ルーマニア、そしてニューヨーク州フィンガー・レイクスからも生産者が出演、試飲会が開かれた。

これらの国々で、ブラウフレンキッシュは呼び名が異なる。スロヴェニアではモドラ・フラニキニア、ハンガリーではケクフランコシュ、スロヴァキアではケクフランコスまたはフランコカ、チェコではフランコカまたはカルマジン、ドイツではレンベルガー、アメリカではスペルはドイツと同じだが、発音はレンバーガーとなる。唯一、ルーマニアはオーストリアと同じくブラウフレンキッシュだ。

AWMBはこの品種から造られる赤ワインの一般的な特徴を「晩熟のブラウフレンキッシュの典型的な味わいは、深みのある森のベリー類やチェリーがやっていて、特徴的な酸味をもつ。緻密なストラクチャとしっかりとしたタンニ

ンがある。ワインが若い段階では刺激的だが、瓶熟成によってヴェルヴェットのようにしなやかとなる。豊かでしっかりとしたワインは長熟の潜在力がある」と解説している。

カルヌトウムのリートのシュピッツァーベルクの葡萄を用いた複数のワインを試飲すると、若いワインはタンニンがしっかりとあるが、ヴァイオレットやスパイスのアロマ、野生のベリーやチェリーの味わい、きれいな酸味と心地よいミネラルさがあり、この畠が別格のブラウフレンキッシュを生み出すことを再確認した。

周辺諸国の中ではチェコのワインが印象的だった。出展していた3ワイナリーはいずれもチェコ南部、オーストリアとの国境まで約60kmにあるモラヴィアが産地。その中で、オタ・セヴシチのワインがブルーベリーなどの上品なアロマ、みずみずしい酸味のある果実味をもち、とりわけよかった。

## オーストリアを代表する黒葡萄 ツヴァイゲルトの発展

現在オーストリアの黒葡萄最大の栽培面積(6000ha)のツヴァイゲルトについて、「多くの顔をもつツヴァイゲルト」と題したティスティング・セミナーが行われた。

ツヴァイゲルトは、1922年にクロスター・イブルク国立研究所で、どちらもヴィティス・ヴィニフェラのブラウフレンキッシュとザンクト・ラウレンツを交配して誕生した。最初はこの研究所生まれの赤ワイン用品種ということで、

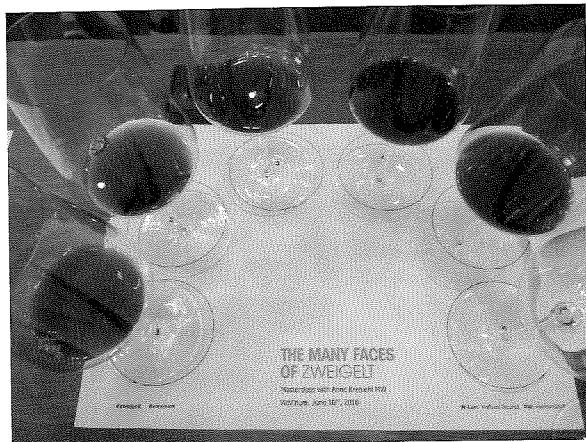
ロートブルガーと呼ばれていたが、1950年代までは試験栽培されるだけだった。

レンツ・モーザーが1929年に書いた栽培技術の本の中で、密植で低い仕立て方では葡萄樹が凍害に遭いやすいから、広い樹間で機械化も可能な高い仕立て方を薦めていた。それに適した品種としてモーザーはロートブルガーに着目、苗木を増やしたことがあっかりとなり、栽培する農家が増えた。そして、1962年にクロスター・イブルク国立研究所の100周年を祝う際に、ロートブルガーとピノ・ノワールのワインが公的に披露されたという。

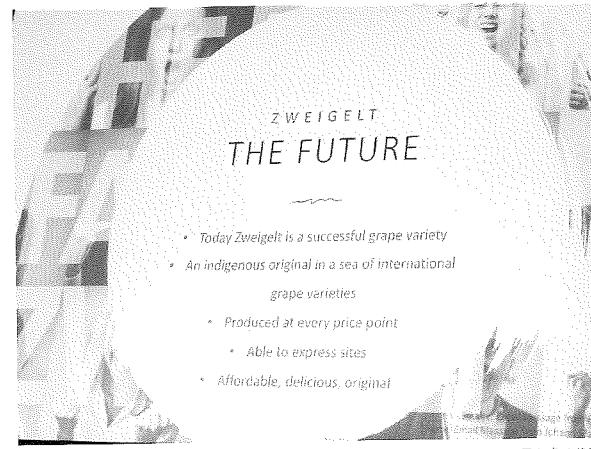
## 名前に秘められた悲話

1975年にモーザーは、交配者のフリッツ・ツヴァイゲルト博士の名前から、ロートブルガーをツヴァイゲルトに改名するよう提言し、認定された。しかし、それには今も反対を唱える人がいるという。ツヴァイゲルト誕生の背景とその名前に反対する人々がいる理由について、ドイツ人のマスター・オブ・ワイン(MW)のアンヌ・クレイビールが異色の解説をした。

「19世紀後半、オーストリアの葡萄畠はうどんこ病、フィロキセラ、ベト病と次々に病害に襲われ、それもあって葡萄以外のビーツなどから偽ワインが造られるなど混乱した時代だった。フィロキセラ対処策としてアメリカ産台木にヴィティス・ヴィニフェラを接木する技術が開発されたが、経済的に困難だった農家はヴィティス・ヴィニフェラの苗木を買えず、ワインを生産するとメチル・アルコールをたくさん生成す



さまざまなスタイルのツヴァイゲルトを試飲。



セミナーのプレゼンテーションのスライドでは「ツヴァイゲルトはオーストリアで最も多く栽培され、販売に成功した、国際品種の中で固有品種のオリジナリティをもつ黒葡萄。どのような価格帯のワインも生産できる。栽培地の特徴を表現する。買い求めやすく、おいしく、独自性がある」と、この品種の将来性を訴えていた。今後は輸出増にも期待がかけられている。

るウフドラーという交雑種を自根栽培し、問題となっていた。ツヴァイゲルト博士はもともと昆虫学者だったが、クロスターイブルクに就職、1921年から葡萄栽培部門のディレクターとなり、そうした状況を知った。そこで、開花が安定し、霜害に遭いにくく、腐敗に耐性があり、成熟期が早く、収穫量を確保できるだけではなく、品質があり、農家に収益をもたらすことができる品種の交配に取り組み、ロートブルガーを誕生させた。その結果、栽培農家の経済とワインの品質の向上に通じることとなり、博士を称えての改名提案だった。しかし、それに反対する人々の中にはクロスターイブルク国立研究所のかつての勤務者やその関係者たちがいた。反対理由は、博士がNSDAP（一般にナチスと称される、国家社会主義ドイツ労働者党）の党員であり、戦時にゲシュタポの協力者だったからだという。博士はそのことで1945年に研究所を辞めさせられ、その後は葡萄栽培コンサルタントとなった。研究所時代にはツヴァイゲルト以外にもたくさんの交配品種を誕生させ、また、生涯において500冊近い葡萄栽培技術の本を著した博士は、自分の名前が交配した葡萄に付けられることは知らずに1964年に死去した」というもの。

### オーストリアの人気赤ワイン

1972年に770haだったツヴァイゲルトの栽培面積は、1978年には3倍近くに増え、その後も増加が続き、現在は黒葡萄栽培面積第1位となった。また、オーストリア国内で販売される

赤ワインとして人気を博しているという。「1985年に起きたジエチレングリコール混入ワイン事件後、オーストリアのワインメーカーたちは厳しい規制を自らに課すだけではなく、高品質ワインの生産を目指した。ツヴァイゲルトも、より優れた葡萄栽培を行い、より高品質なワインを造ることで、この品種をメイン・ステージに登壇させられると考えるようになり、やがてオーストリア各地で栽培され、販売も成功した。その理由は、病害や霜害への耐性、栽培しやすく、栽培地を選ばず、果皮は厚いが生理的成熟を得られ、品質ワインとしての競合力をもつからだ」とクレイビールは言う。

試飲は「スタイルの多様性」「ノイジードラーゼー DAC、湖のワイン」「オーストリアの多彩なワイン産地」「カルヌトゥムの単一畠」「ノイジードラーゼーの熟成ワイン」の5テーマ、26種のツヴァイゲルト。「オーストリア人は若飲みタイプのツヴァイゲルトを好むが、この品種は果実味がエレガントでバランスのあるものから、単一畠のトップクオリティの葡萄から造られる長熟可能な複雑なものまで多様なスタイルのワインとなる」とオーストリア人のワインエデュケーター、クリスチャン・ゼッヒマイスター。また、クレイビールは「オーストリアでこれほど広範囲な、異なる産地で成功できる品種は、ほかにはないだろう」と語った。

異なるテーマを通して、カルヌトゥムのワインがおしなべて高品質で、その味わいはブルーベリーやブラックベリー、緻密で深みがあり、みずみずしい酸味とバランスのよさもあり、全

体的にエレガントさを感じ、印象的だった。ヴィンテージはすべて2015、いずれもリートが付くが、異なる単一畠のものだった。

「カルヌトゥムは1980年代に浮上してきた小さな産地だが、特に単一畠のワインは選び抜いた葡萄を用いていて、緻密さがあり、繊細なタンニンをもつ」とゼッヒマイスターはコメントした。

### 伝統的品種を新世代が披露 ローター・ヴェルトリーナ

ヴィーヴィナム会期中に生産者グループが開いたディナー・パーティのひとつに、ローター・ヴェルトリーナ Roter Veltliner という珍しい品種をテーマにしたものがあった。主催したのは、この品種単一からワインを生産する、アイシンガー、ヨーゼフ・フリット、レス、セツツァー、ソルナー、シュスター、マントラホフ、ルディ・ピヒラーの8ワイナリー。いずれもワイナリーを受け継ぐ次世代の若者たちがコメント、主役に立ち、その親たちは裏方に徹していた。

ローター・ヴェルトリーナはおそらくイタリアのヴァルテッリーナ原産で、そこからオーストリアに運ばれたという説があるが、オーストリアでは古くから栽培され、固有種と見なされている。ちなみに、グリューナー・ヴェルトリーナとは関係がない。現在、合計195haの栽培面積があり、ヴァグラム、カンプタール、クレムスターに集中し、ヴァインファイアルとヴィーンの周囲で若干栽培される。



祖父が好奇心から植えつけ、1970年代にオーストリア初のローター・ヴェルトリーナー単一ワインを造るようになったというヴァイングート・マントラホフの新世代、ヨーゼフ・マントラさん。ヴィンテージ1973をプライドで試飲に供する際には「携帯電話が初登場した年」とヒントをくれた。

ひと房の中の果粒の成熟度にはらつきがあり、緑がかった黄色や薄い灰紫色の果粒が混じる。厚い果皮をもつが、腐敗菌に弱い。日照に恵まれた、レス土壌が深く堆積する土地が適するという。栽培が難しいことに加え、グリューナー・ヴェルトリーナー・ブームが起きて、畠はそれに取って代わられ、1999年以降、栽培面積が減少しているという。

ゲミシャター・サツ（混植畠のフィールド・ブレンドから造るワイン）に用いられる品種のひとつ。しかし、テイスティングに参加したワ

イナリーの中にはクレムスターのマントラホフのように1970年代からこの品種単一で瓶詰め、販売してきた生産者もいる。

テイスティングにはヴィンテージ2017や2016の若いワインとともに、マントラホフは1973、アイシンガーは2008や1995などのバック・ヴィンテージを供した。

ワイナリーによって発酵や熟成は、オークの小樽、あるいは大樽、またセラミック製の卵形タンク、ステンレスタンクなど容器が異なるが、若いヴィンテージは全体を通して穏やかなかん

きつ類のアロマ、ほのかな塩味、そして直截的な酸味を感じた。

マントラホフの単一畠ライゼンタールの葡萄を用いたヴィンテージ1973は、オレンジがかった濃い黄色、りんごの風味がある軽やかさ。また、アイシンガーの単一畠シュタングルの葡萄から造られたヴィンテージ2008と1995は、前者は熟成感とともにしなやかな粘性があり、後者は塩味に感じるミネラルさ、タイトなスタイルだった。

〈Tomoko EBISAWA〉

## ヴィンテージ2018 収穫速報 完熟、そして早い収穫

「オーストリアの葡萄樹は、ほとんどの産地で2018年の生育サイクルを特徴づける酷暑と水分不足を耐え抜いた。結果、非常に早く完熟したヴィンテージを手にすることとなった。高い気温が長く続いたことで、一貫して例年よりアルコール濃度は高く、酸度は低めのワインとなっている。収量は平均をわずかに上回る、約260万hlを期待している」と、葡萄栽培協会会長であるヨハネス・シュムッケンシュラーガーは述べた。

2018年の萌芽は例年よりむしろ遅く、過去2年間と比べて、霜によるダメージを受けないという利点がもたらされた。4月と5月の萌芽直後に熱波が来たことで、史上最も早い開花となった。ほとんどのワイン産地では、5月に開花が完了した。これは、例年より2、3週間早い生育サイクルのスタートであった。

数度の豪雨のあと、暑く乾燥した夏が到来。干ばつや、長期にわたり30°Cをはるかに超える暑さが続いたため、浅い土壌の畠や植栽したての区画に特にストレスを与えた。かんがいが可能な場所では常に設備を稼動させ、栽培家は干ばつの甚大なストレスに対抗するため、あらゆる手段を用いた。若木の房は、葡萄樹そのものを健全に保つために、しばしば切り

落とし、犠牲にしなければならなかった。

多くの産地で、急な大雨や雷雨が頻繁かつ局地的に見られた。ヴァッハウのシュピッツァー・グラーベン、ミッテルブルゲンラント、シュタイヤーマルクの幾つかの産地では、わずかに雹の嵐が発生した。

夏季にほとんど雨が降らなかった地域、例えばヴァインフィアーテル北部の広大な産地では、干ばつによる大きな被害が記録された。よい房がなっても果汁量は控えめである。

乾燥した気候条件と生育サイクルが早く進んでいたので、葡萄が病気にかかる危険性はほとんどなかった。

干ばつの影響がさほどひどくなかったシュタイヤーマルクでは、質・量ともに非常によいヴィンテージとなることが期待される。ブルゲンラントではよい房つきで、頻繁に降雨もあったので、十分な収穫量が期待できる。特に赤ワインにおいては、最高品質のものを醸造できそうだ。ニーダーエスタライヒとウィーンでも満足のいく収穫量と素晴らしい品質を見込める。  
（8月28日付、オーストリアワイン・マーケティング・ボードのプレスリリースより）